



●バラバラになって大繁殖

ーオヨギイソギンチャクー

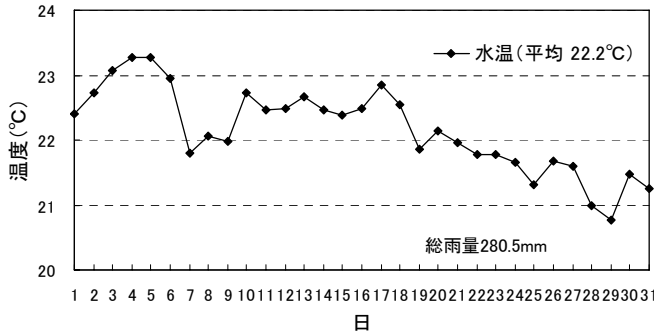
今、阿嘉島臨海研究所では、サンゴを卵から増やす研究に取り組んでいて、港の中のいかだにつり下げたカゴの中でサンゴが育っているのを知っている人も多いと思います。去年（2006年）12月には、育てたサンゴをダイビング協会の人たちと一緒にマジャノハマに移植することができました。私たちがサンゴを育てるときに、なぜカゴを使うかという、1つには、とても小さな子供のサンゴが海藻に覆われないように、海藻を食べしてくれる巻貝と一緒に育てるのですが、その貝が逃げ出さないようするため、もう1つには、魚などにサンゴがかじられないように守るためです。このような、子供のサンゴを守る仕組みは、ほかのいくつかの動物たちにも都合が良いらしく、カゴの中にはいろいろな動物が出現してきます。たとえば、ガンガゼやシラヒゲウニなどウニの仲間や、クモガニなどのカニ

たちなどです。天敵てんできがないことで、自然の中に比べると、生き残りやすいのでしょう。

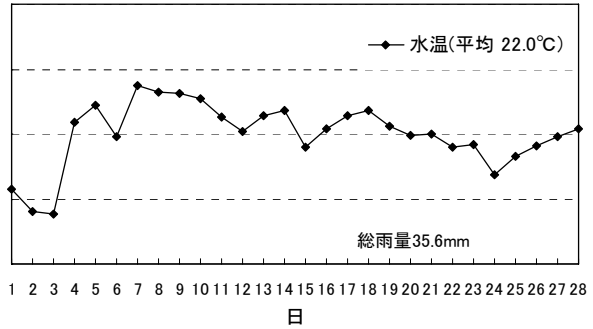
今回紹介する生き物も、同じようにサンゴを育てるカゴの中に現れたものです。遠目には、色も茶色いし、ふわふわしているし、海藻のようにも見えますが、ちゃんと見てみるとイソギンチャクでした。左の写真は、1個体だけですが、カゴの中にはこれがたくさんくっついていました。このままでは、サンゴが埋もれてしまうかもしれないので、掃除しなければなりません。本当にたくさんのイソギンチャクだったので、その時は「やっかいだな」と思いました。きっとみなさんは、イソギンチャクは岩などにしっかりくっついていてという印象をもっていることでしょう。ところが、そのイソギンチャクを何気なく手であおいでみると、その水流でいくつかのイソギンチャクがふわりとかごからはずれてしまったのです。「これはもうけた」と思って、さかんに手であおいでやると、ほとんどのイソギンチャクがカゴからはずれて、あとは道具で少しはぎ取ればよいくらいしか残りまでせんでした。ほっとして、あたりを見回してびっくりしました。はずれたイソギンチャクがそこら中に漂っているのですが、なんとそのいくつかが“泳いで”いるのです。キュッキュッと体をひねるように動かしながら（ちょうど振

定点観測

2007年 1月



2007年 2月



られたまといのような動きです)、けっしてもだえているのではなく、明らかに口の方向に泳いでいます。この生き物こそ、オヨギイソギンチャクという変わり者のイソギンチャクなのでした。きっと、ミノウミウシなどイソギンチャクを食べる動物から逃れるために身につけたのでしょうが、実に上手な泳ぎっぷりでした。

オヨギイソギンチャクのユニークさは、泳ぐことだけではありません。実は、このイソギンチャクは、^{しよくしゆ}触手1本から再生して1つの個体になることができるのです。みなさんの腕1本からもう1人の自分ができるようなものです。しかも、このイソギンチャクの触手はちょっとしたことですぐに取れてしまいます。おまけにたくさんの触手がありますから、状況によっては、^{もうれつ}猛烈な速さで増えることができます。そうした結果が、今回見かけたカゴの中の様子だったのでしょう。

オヨギイソギンチャクは、このように面白い生き物なのですが、注意しなければいけないことがあります。それは、このイソギンチャクのもつ^{しほう}毒針の刺胞です。思いのほか強力で、人間が刺されると痛みを感じたり、赤い^{ほっしん}発疹ができることがありますし、先ほど述べたものすごい^{はんしよく}繁殖力とあいまって、時折、^{ようしよくじょう}養殖場で大発生して育成中の魚を殺してしまう被害が出ています。内地のヒラメやトラフ

グでの被害が報告されていますが、沖縄でもスギの子供が、このイソギンチャクにやられることがあるようです。そういえば、カゴの掃除の時も、ずいぶん手や顔がちくちくしました。みなさんも十分に注意してください。

今回はオヨギイソギンチャクをたくさん見た話をしましたが、実は慶良間の海では、そういうことはあまりありません。このイソギンチャクは、カワハギの仲間やインダイに良く食べられるそうなので、カゴの中でなければ、いろいろな魚に食べられて、増えられないのかもしれない。もちろんまったくいないわけではなく、時々、海草や死サンゴの上などにいることがあるので、探してみてください。泳いでいる様子を見たい人は、映りが悪いのですが、短いビデオがありますので、研究所をたずねてください。

● 阿嘉島の海より

3月10日、阿嘉小中学校の卒業式がありました。5名の小学生と4名の中学生が元気に巣立っていきました。そして4名の中学生はそれぞれみごと志望校に合格し、春からは島を離れて生活することになります。この子供達がいつ島に戻ってきても安心できるよう、島の自然や文化を守っていききたいですね。

